

氏 名	杉 山 和 男 すぎ やま かず お
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	論 農 博 第 895 号
学位授与の日付	昭 和 56 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	採卵養鶏経営および産地の発展に関する研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 頼 平 教 授 上 村 恵 一 教 授 菊 地 泰 次

論 文 内 容 の 要 旨

戦後、わが国の採卵養鶏経営は、自給・副業養鶏から商品生産的な複合・主業養鶏へと部門規模の拡大をはかり、さらに専業・企業養鶏農家の比重を大幅に増やしてきた。また、このように個別養鶏経営として規模を拡大し、内部経済と技術革新の利益を追求するだけでなく、装置化・システム化された主産地として産地規模の拡大をはかり、いわゆる準内部経済を伴う革新の継起的な採択によって、総合的価値生産性を飛躍的に高めてきた。

採卵養鶏産業は、競争原理の貫徹し易い産業組織の性格をもっている。したがって規模経済を伴う技術革新が継的に採択されるにつれて、階層分化が急激に進行し、さらに都市近郊養鶏が後退し、遠隔地養鶏が進出するという方向で、産地移動が急速に展開している。

近年は、構造的生産過剰が深刻になり、今後も産地間の過当競争を続けざるをえないのか、それとも、生産費・流通費の節減と品質向上については従来どおり産地間競争を続けながら、それとともに需要拡大および供給調整対策に関しては、産地間協調を確立するという方向をめざすのか、重大な岐路に立っているとみてよい。

著者は、本論文において、このような問題意識のもとにつぎの二つの研究課題を設定している。その一つは、採卵養鶏経営の産業的特質および経営的特質に着目しながら、その発展のメカニズムを解明することである。二つめは、著者が農家養鶏の発展方向として望ましいと評価している三つの発展類型をとりあげて、それぞれの発展のメカニズムと将来の発展方向を解明することである。

序章「課題と方法」について、第1章「わが国における採卵養鶏の展開過程」では、全国的かつ長期的視野から採卵養鶏産業全体の発展のメカニズムを分析し、階層分化と産地移動を誘発した外生的および内生的な諸要因間の有機的な作用機構を鮮明に描いている。

第2章「養鶏協業における経営発展のメカニズム」では、「東山産業」を模範的事例として調査して、その発展過程を3段階に区分し、各段階の特色を示している。さらに外生的条件の変化とそれに対応する生産・流通・管理・組織過程の革新の採択と相互の調整機構を発展段階ごとに解明している。

第3章「近郊大規模集団養鶏経営発展のメカニズム」では、小河原農協を中核とする養鶏産地を調査して、戸数増加、ついで1戸当り飼養規模の増大による産地規模の拡大、さらに多重的飼養規模階層構造の維持によって共同施設の適正操業度を確保し、市場取引力を強化してゆく過程、および地域複合組織によって糞尿公害を克服してゆく過程を考察している。

最後に、第4章「遠隔巨大システム養鶏経営発展のメカニズム」では、児湯養鶏農協を調査して、1戸当り平均1万5千羽の大規模専門経営だけでもって産地規模120万羽の巨大産地を形成し、生産・流通・組織・管理の全過程を貫くパッケージ・システムを完成し、産地間競争力を飛躍的に向上させてきたメカニズムを解明している。

論文審査の結果の要旨

わが国の採卵養鶏は、昭和30年代には副業的養鶏が主力となって安定的に成長してきたが、40年代に入ると規模経済を伴う革新の採択による生産費節減競争が激化して、階層分解基軸を押し上げ、採卵養鶏の主力は、主業的複合経営に移り、さらに50年代には企業の専門経営へと移行した。

本論文は、このような採卵養鶏経営形態の動態的な変化と階層分化、それに伴う産地組織形態の変化と産地移動に着目して、これらの動態的な展開のメカニズムを解明することを試みたものである。

本論文の評価すべき点をあげれば、以下のとおりである。

(1) 農業経営および産地の動態的展開過程の要因分析に関する従来の研究方法を批判的に摂取しながら、採卵養鶏のもつ技術的・経営的・産業組織的特質を踏まえた動態分析モデルを構築している。

(2) 著者は農家養鶏の望ましい発展形態として、大規模協業経営、近郊大規模集団養鶏経営、遠隔巨大システム養鶏経営を選び、それぞれについて先進的な事例を調査し、発展のメカニズムと将来の発展方向を解明しているが、その成果は後進的・停滞的養鶏経営に対してきわめて有効な示唆を提供するものである。

(3) 採卵養鶏は、生産費および流通費節減競争、生産物の品質向上および市場取引力強化競争の最も激しい産業であり、競争に勝つ要件は、外生的条件の変動に対して的確に適応しながら、生産要素調達、生産技術、生産物販売、公害防止技術、共同組織づくりの各局面において、先駆的に規模経済を伴う技術革新を採択することである。本論文は、上記3型の採卵養鶏経営および産地について、生成・発展・成熟の各展開過程において、どの局面で根本的革新が起り、それがどの局面で派生的革新を誘発し、相互の調整過程を経ながらより高次の均衡段階へと発展してきたか、という課題について定性的かつ定量的に緻密な分析を行い、発展メカニズムの類型化に成功している。

(4) 産地規模を拡大し、生産・流通過程の共同組織づくりによって外部経済を内部化しようとするれば、共益総額を最大にする産地規模および農家階層構造が問題になるが、著者は、産地の立地条件と発展段階および農家の経営内部条件と互恵的意識の成熟度、産地リーダーと指導機関の考え方に応じて、その適正値が異なることを明らかにしている。

以上のように、本論文は農業経営および産地の発展理論の構築に関していくつかの新知見を加えたものであり、農業経営学の研究ならびに養鶏の実践面に寄与するところが大きい。

よって、本論文は、農学博士の学位論文として価値あるものと認める。